

## 野生ランの栽培と自生地環境の理解

夏井 高人

ラン科植物の中には非常に特殊な環境に適応しているものが少なくない。そのようなランは、自生地環境では何ら問題なく生育するのだが、少し違う環境に置くとたちまち衰弱し死滅してしまうといった例がしばしばある。逆から言えば、自生地の特殊な環境に適応しすぎてかなり融通性のない不器用な生物になってしまっているということも可能だろう。

このような問題は、ラン科植物の種子の発芽のときからある。よく知られているように特定の種類の菌類が存在しなければ発芽しない。しかも、最近の研究結果によれば、発芽の際に関係する菌類と生長・生育の際に関係する菌類とが別の種類のものであることもあり、そのような異なる種類の菌類が同じ場所に存在していなければ発芽・生長・生育することのできないランは、相当融通のきかないランだということができる<sup>i</sup>。

また、自生地の自然環境が非常に重要であることは当然のことです。例えば、高山植物であるラン科植物は暖かい場所や暑い場所では溶けて死んでしまう<sup>ii</sup>。逆に温暖な地域に自生するランは、一定以上の気温を維持しないと、しもやけのような寒冷障害を起こして死んでしまう<sup>iii</sup>。

そのような気象条件の中には季節の変化による温度や湿度の変動といったものも含まれる。例えば、雨季と乾季という2つの季節が毎年交互にやってくる地域に自生するランでは、極端な乾燥と極端な湿気という2つの要素を交互に与えなければそのような季節サイクルに合わせた生長・生育ができなくなって衰退し死んでしまうことが非常に多い<sup>iv</sup>。同様に、一年中湿った場所に生育するランでは、生長期においてはもちろんのこと休眠期においてさえも一定程度の湿度を保たなければ死んでしまうことがある<sup>v</sup>。

ところで、愛好家が野生ランを栽培するという行為は、基本的には、自生地とは異なる自分の環境の中でその野生ランを無理に生育させるという行為だということができる。そのため、無理の度合いがひどければ当然死んでしまうことになる。

上手な栽培家の方々の実例を観ると、要するに、自生地とは異なる環境としての栽培場所において、自生地に近似する疑似環境を構築したり、自生地の温度・湿度の変化の限界値を越えないように様々な工夫をしたりしているということがわかる。もちろん、個々のランの生態を知り、その生態を十分に理解した上での栽培をしないとダメなことが当然のことなのだが、その場合でも、そのようなランがどうしてそのような特殊な生態を有しているのかを考え推測することは非常に重要なことだと思う。そして、そのような特殊な生態をもつランとして進化した最大の理由は、やはり「環境への適応」ということに尽きるから<sup>vi</sup>、結局、そのランの自生地の環境をよく知り、理解することがとても大事なことだということなるだろう。

以上のような具合に、理屈は誰でも知っているかもしれない。問題は、それをちゃんと理解・記憶し、そして実際の栽培に応用できるかどうかということに尽きるだろう。この文章を書いているこの私自身、失敗と後悔を繰り返しながら反省・学習するということの連続なので、本当は、全くもって偉そうなことを言えたものではない。

同じように育てれば大丈夫なはずのランでも、個体差があるので、それを丁寧にみてやらなければならない。

生き物であるランは、生きている間、常に変化し続けている。生長・生育するということは、変化するということと同義語だ。だから、昔から言われているように、毎日丁寧に様子を観察し、ランが何を欲しているかを察知して丁寧に対応することが一番大事なように思う。

日本のものだけではなく世界各国の様々な野生ランを栽培しながら、昔から言われてきたことの大事さを痛感する毎日だ。

---

i 一般に、菌類と強い共生関係にあるランではそのような傾向が強い。例えば、マヤラン (*Cymbidium macrorhizon*) などのランが現時点では栽培不可能となっているのは、マヤランと共生している菌類の種類や共生関係の詳細がまだ明確になっていないからにほかならない。

ii 最近では、ワインセラーを用いた栽培が普及しつつある。

iii 冬季には室内栽培とするか温室で栽培するのが一般的だが、一口に室内栽培と言っても個々の家庭における栽培環境が異なることから、基本的には最低気温と湿度をちゃんと観察し、適切に最低気温と湿度

---

を管理することが重要だということを理解すべきだろう。

iv 自生地 of 雨季に合わせて、その時期には思い切ってたっぷりと水をやる必要のあるランでも、日本の梅雨のようにずっと雨が降り続けのような状況を想定するのではなく、例えば、比較的短時間だけスコールによる降雨があり、それ以外の時間帯はやや乾燥しているような場合には、そのような降水をイメージした水分供給がベターと思われる。着生ランの場合には特にそうで、一般に、雨が降っている間は樹幹などを大量の水が流れ落ちるが、雨がやむと乾燥した状態に戻るのが普通なので、そのような状況を想像しながら着生ランの栽培方法を工夫しなければならない。着生ランの鉢植え栽培において、「水をやる」のではなく、「鉢に水を通す」という表現で示されるようなやりかたで灌水すべきだとよく言われるのは、水分を必要とするときにはたっぷり補給しなければならないが、そうやって水分を補給した後はしばらく乾燥した状態に置かないと腐ってしまうことがあるからにほかならない。それは、「樹幹に着生している」状態のランでは、疑似的な樹幹を再現してやる必要がある。石斛や長生蘭の栽培でも基本的には同じだと思われる。

v 着生ランの場合、乾季の休眠期にはカラカラに乾燥した状態になるものが少なくない。しかし、湿潤な地域に自生する地生ランの中には、カラカラに干してしまうと死んでしまうものもある。一般的には、球形のイモのような状態で休眠する地生ラン（欧州の *Orchis* など）は乾燥に強いが、根のような状態で休眠する地生ランは乾燥に弱いように思う。ただし、湿地に生育する地生ランでも、冬には乾燥させたミズゴケのようなカラカラの冬季湿原環境の中で根のような状態で休眠するものでは、相当乾燥に強いものがある。やはり、自生地の環境とそこに適応するために進化させた特殊な生態を、ランの種類によって個別に十分に理解することが大事だと言える。

vi たとえば、乾燥した冬季（乾季）には葉を落として乾燥に耐えることができるように進化したランを栽培する場合、乾季に相当する時期には乾燥した環境で水をやらずに栽培をしないと根が腐って死んでし